

第V章 学業成績と部活動



1. 学校の楽しさ

日常の学校生活

本章では、部の参加の状況に関係なく全生徒を対象に、中学生の部活動への対応の状況をかれらの日常の学校生活との関連の中で捉えてみたいと思う。

本モノグラフシリーズ vol. 12「中学生の自己像」でも述べられていたことだが、現代中学生の姿は成人が期待するような意欲的な“人生、意気に感ず”のようなものではない。授業中も、食い入るような眼は見せない。相当いい加減でしらけている様子は図40にも表れている。これは、1年から3年全体の授業

に関する質問の中から、「授業の時、おしゃべりをする」、「授業中、先生の話まじめに聞いている」、「予習や復習をきちんとしている」3項目を取り出して、その割合を示したものだが、授業中は、相当数の生徒が「かなり私語を交し」、半分近くの生徒は「先生の話聞いたり聞かなかったり」、また3人に1人以上が「予習・復習をほとんどやってきていない」状態である。

そのため、学習内容の理解度は、学年が進むにつれて落ちてくる。図41は、英語の学年別の理解度を示したものだが、全体的には、3分の2の生徒が半分以下しかわからないと

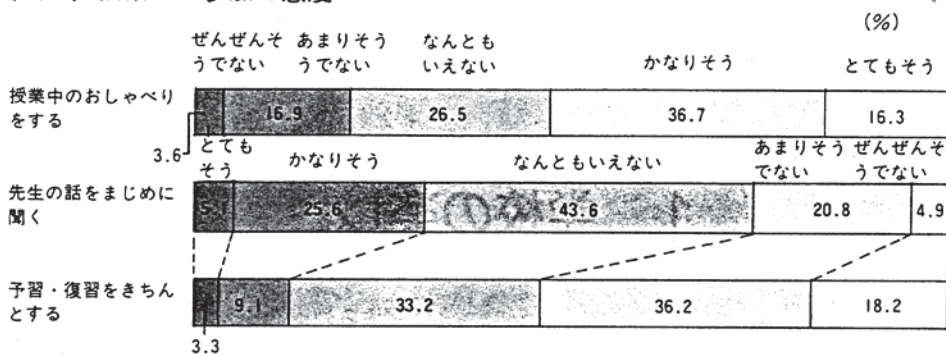
言い、「全部」「ほとんど」理解している生徒の割合は、1年生の時からそれほど高い割合でない上に、学年が上がるにつれてはつきりと減少していく。

学習だけではない。生徒の興味をひく球技大会などでは、学年、性別を問わず60%以上の生徒が積極的に参加するが、清掃当番や学級活動——生徒にとって興味や趣味の対象にならない、どちらかといえば奉仕的、義務的なもの——に対しては消極的である。“自信”には欠けているようである。したがって、「将来、どんなおとなになれると思うか」とか、「自分をどういう人間だと思うか」などと問われると、確信のある答えは返せない。図42からわかるように、自分では、「友人から信頼されている」とも、「異性に人気がある」とも思えない。また、将来を聞かれても困る様子で「社会の役に立つ」とも「尊敬される人になれる」とも言い切れない。「たぶん」

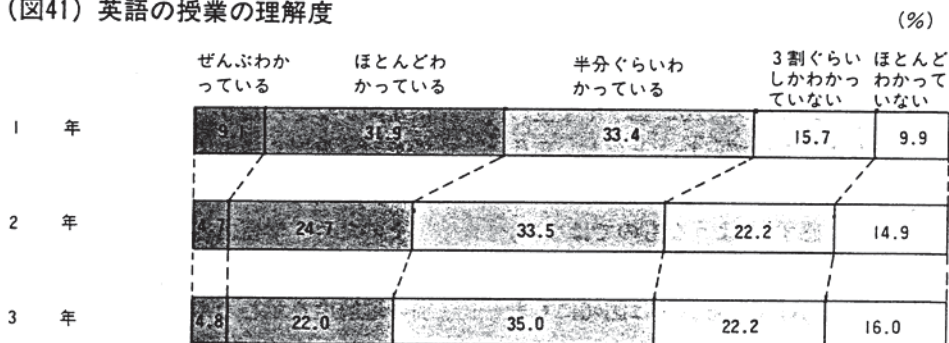
を入れても「なれる」と答えた者は、それぞれ、17%、13%であった。現代のような複雑な社会構成の中では、中学生は将来への志向を明白にすることが難しくなっているのかもしれない。

それでいて、中学生は人生肯定派で、悩もうともしないようである。世間では校内暴力がとりざたされ、中学校はさぞかし荒廃し、生徒たちは学校へ行くのを嫌っているのかと思うと、そんなことはない様子なのである。そうした傾向は、表11に表れている。きょうは学校へ行きたくないと思うことが、「いつもある」と回答した生徒はさほど多くない。多くの生徒にとって学校は今も楽しい場としての機能を果たしているように見える。「難しいことなど考えたって仕方がない。現状の中で自分の楽しみを見い出していった方がよい」と感じているようである。

(図40) 授業への参加の態度



(図41) 英語の授業の理解度



(図42) 現在の自己像と将来

(%)

	とても そう思う	かなり そう思う	やや そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない	
友人から信頼さ されている	4.4	7.1	28.9	45.0	14.6	
異性から人気 がある	4.4	14.2	40.6	36.6		
社会の役に立 つ人に	4.2	絶対 なれる	たぶん なれる	どちらとも いえない	まあ なれない	絶対 なれない
尊敬される人 に	4.1	3.8	8.7	54.5	23.9	9.1

(表11) 学校へ行きたくないと思うことがあるか(3年)

(%)

性別	尺度				
	いつもある	時々ある	たまにある	1~2度ある	全くない
男子	7.0	25.6	27.8	18.1	21.5
			67.4		
女子	10.5	26.6	31.5	18.3	13.1
			62.9		

2. 学業成績との関係

部活動の充実感と学業成績

学校生活の楽しさは、生徒たちの属性により異なると思われるので、ここでは、学業成績に注目して成績のよしあしが、部活動にどう関連するのかを考えてみたい。

「優勝はできるが、毎日の練習はとても厳しい部」と「試合にはいつも負けてしまうが楽しい部」のどちらかを選ばせた結果を、生徒の将来の見通しとクロスさせたのが表12である。全体では「厳しい部」と「楽しい部」の比は4対6で「楽しい部」が支持されたが(P.15参照)、成績上位者と成績下位者の反

応が、全く逆の傾向を示している点に、注目したい。つまり、成績に自信を持ち、難しい大学に入れると思っている生徒は「厳しい部」を肯定する者が多く、成績が下位になるにつれて「厳しい部」を敬遠し、「楽しい部」を指向する者が増える。

しかも、こうした傾向が、さまざまな項目に共通してみられることが注目される(表13)。部の中心的存在か、部活動が厳しいと思うか、顧問の先生に満足か、上級生や下級生に満足かなどの質問に肯定的な高い比率を示すのは、人数的には僅かな成績上位者だけに限られている。

(表12) 部の志向×将来の見通し (部活動参加者)

(%)

将来の見通し \ 項目	苦しく厳しい部	負けるが楽しい部
とても難しい大学へ進め ると思っている者	52.9	47.1
かなり難しい大学へ進め ると思っている者	40.3	59.7
ふつう程度の大学へ進め ると思っている者	42.0	58.0
かなりやさしい大学へ進め ると思っている者	35.7	64.3
とてもやさしい大学なら 進めると思っている者	35.3	64.7
全 体	40.5	59.5

(表13) 部活動の活動状況×将来の見通し (部活動参加者)

(%)

将来の見通し \ 項目	部の中心 的存在か	部は 楽しいか	部は 苦しいか	部は 厳しいか	部に 満足か	部の顧問 に満足か	上級生に 満足か	下級生に 満足か
とても難しい大学へ進め ると思っている者	52.9	48.6	28.6	27.8	33.3	38.9	50.0	30.4
かなり難しい大学へ進め ると思っている者	31.8	40.2	10.7	11.4	11.5	17.5	19.8	4.5
ふつう程度の大学へ進め ると思っている者	28.4	35.3	8.0	6.7	18.3	16.8	20.2	4.2
かなりやさしい大学へ進め ると思っている者	27.8	36.6	11.6	8.0	19.6	12.5	19.5	3.8
とてもやさしい大学なら進 めると思っている者	23.5	29.4	11.9	10.2	17.6	17.7	18.8	5.7
全 体	28.7	35.4	10.0	8.6	18.1	17.3	20.8	5.3

注) 1 — 2 — 3 — 4 — 5
 とても かなり 少 少 あま ぜんぜん
 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4 ————— 5
 %

つまり、成績上位者は部活動の中でもきちんとした位置を占めているだけでなく、部活動を苦しく厳しいものと受け止めながらも、部活動を続けることを楽しいと感じている。顧問の先生や上級生、下級生ともよい人間関係を作り、充実した生活を送っている。それに対し、成績中位以下の者にとって、部活動は楽しさに欠け、十分な満足を得られないように見える。

体罰と学業成績

おかしな話だが、顧問の先生(コーチ)からなぐられた経験の有無の結果も、このあたりの事情を微妙に反映していて注目してよい数値を示している。(表14)。

中学校の部活動では、「なぐられる」ことは少ないようで56%、すなわち半数以上の生

徒は、なぐられた経験は全くないと答えている。

しかし、成績上位者だけに限ると、なぐられた者の割合は、47%と他を断然引き離して高率である。かれらが部の中心であれば顧問は当然期待をかけるであろう。厳しい態度にも出ることが考えられる。それが、なぐるといふ行動につながるのかもしれない。しかも、生徒の方にその厳しさを受け止めるだけの誇りと理解がある。顧問と生徒の間には相当の信頼関係が築かれており、過度にならない限り、その行為は親愛の度を増すものとして機能し、不信を招かないのである。

しかし、中位以下の生徒と教師の間ではそうはいかない。先生も、中位以下の生徒には言葉だけの叱責にとどめているのかもしれない。ただ、最下位の者の割合がやや多いのは、

(表14) 顧問の先生(コーチ)になぐられたことはあるか(部活動参加者)

尺 度	(%)			
	よくある	時々ある	ほとんどない	ぜんぜんない
将来の見通し				
とても難しい大学へ進めると思っている者	13.9 └ 47.2 ─┘	33.3	8.3 └ 52.8 ─┘	44.5
かなり難しい大学へ進めると思っている者	10.5 └ 28.0 ─┘	17.5	21.9 └ 72.0 ─┘	50.1
ふつう程度の大学へ進めると思っている者	7.6 └ 24.2 ─┘	16.6	17.0 └ 75.8 ─┘	58.8
かなりやさしい大学へ進めると思っている者	4.5 └ 21.5 ─┘	17.0	23.2 └ 78.5 ─┘	55.3
とてもやさしい大学なら進めると思っている者	6.5 └ 27.5 ─┘	21.0	19.6 └ 72.5 ─┘	52.9
全 体	8.1 └ 26.0 ─┘	17.9	18.0 └ 74.0 ─┘	56.0

教師の側から見れば、ついにやむなく手を出した、ということになるだろう。そして、生徒の側は教師の気持ちを理解することもできないまま、自分自身も自信を失いながら、不満を持ちつつ退部、となっていくのではないかと考えられる。

退部者の成績

そこで、念のために退部の状況を、数学の成績との関連で見よう。成績は、トップ、上位、中の上、中位、中の下、下位の6段階に分けてあるが、退部の時期を答えている表15は、いくつかの特徴を示している。

まず、成績下位者など、1年生の時に早々と退部していく。特に最下位者に至っては、1年生のうちに2人に1人以上の者がやめていってしまう。98%までが2年生の途中まで、部活動から姿を消していってしまっている。

全体的に見て、退部者は決して多数ではない(約17%)。これは好ましい状況だが、ときおり、教師の間で言われる、「勉強はだめでも部活動で救おう」とか、「非行化から生徒を守るために部活動は有効な手段」といった考え方は、言うは易しく、行いにくいことを表15は示している。

(表15) 部活動をやめた時期 (退部者)

(%)

成績 (数学)	やめた 時期	1年1学期	1年 2~3学期	2年 になるとき	2年の途中	3年 になるとき	3年 になってから	実数(名)
ト ッ プ		10.0	10.0	20.0	40.0	20.0	0.0	10
上 位		11.1	16.7	22.2	22.2	11.1	16.7	18
中 の 上		14.0	18.0	26.0	26.0	10.0	6.0	50
中 位		6.3	31.8	27.0	25.4	6.3	3.2	63
中 の 下		17.0	25.6	19.1	21.3	10.6	6.4	47
下 位		13.0	41.4	13.0	30.4	0.0	2.2	46
全 体		12.0	27.3	21.8	26.1	7.7	5.1	234

理想の顧問教師像

次に表16を見つめてみよう。成績のよしあしの区別なく、中学生の求める顧問教師像は、生徒を「上手・下手の区別なく平等に扱ってくれ」、いつも「一緒にやってくれ」、「技術

にすぐれている」ことである。逆に、「強い人、上手な人を伸ばし」、「勉強のことまで面倒をみる」ような、そして、もう君たちは中学生なのだからと「生徒にまかせ」っぱなしの顧問は敬遠される傾向を示している。

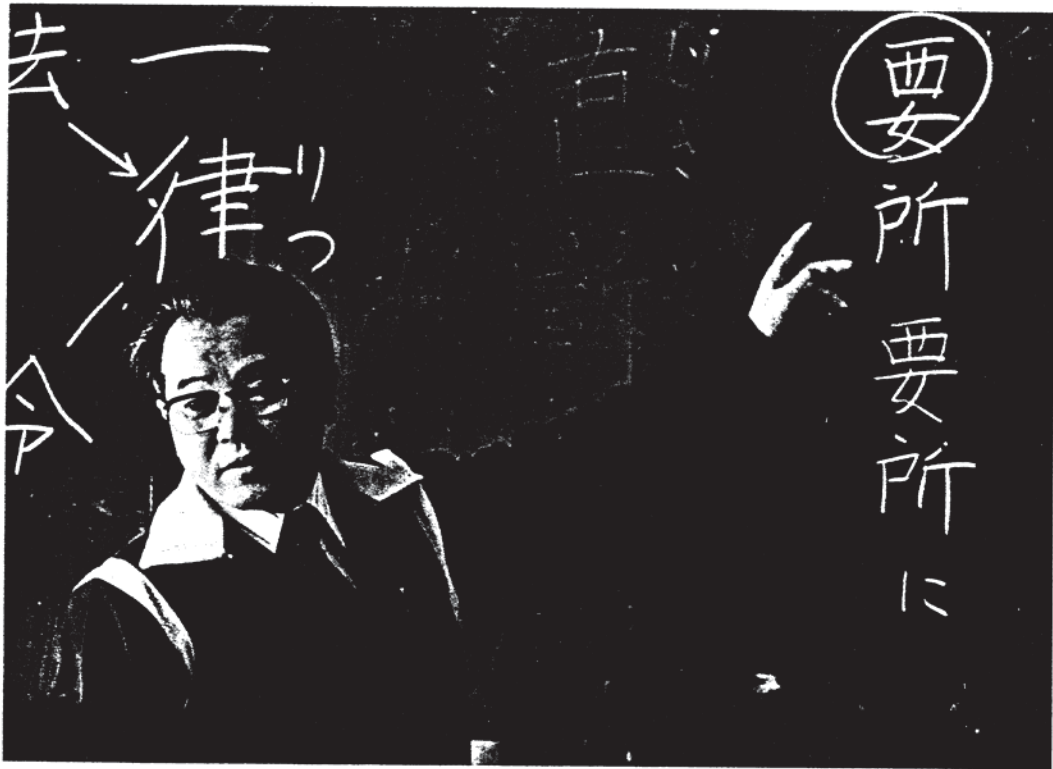
(表16) 好きな顧問の先生のタイプ×数学の成績 (部活動参加者)

(%)

顧問のタイプ 成績(数学)	技術がすぐれている	やさしい	厳しい	兄(姉)のような	生徒にまかせてくれる	一緒にやってくれ	勉強の面倒も見てくれる	悩みを聞いてくれる	上手な人を伸ばす	平等に扱う
トップ	56.7	56.7	43.3	23.3	26.7	65.0	23.3	36.7	26.7	70.0
上位	44.4	54.8	36.3	12.9	12.1	59.7	16.1	29.0	11.3	67.5
中の上	43.4	47.5	38.4	13.1	11.1	57.1	17.7	33.8	8.6	69.7
中位	37.4	52.5	36.1	14.3	16.1	56.1	14.6	31.7	12.5	64.4
中の下	35.5	48.1	23.4	16.5	15.2	52.8	8.2	29.0	6.5	64.9
下位	33.6	50.7	26.5	13.3	19.9	41.7	13.7	23.7	7.6	52.1
全体	39.2	50.8	32.4	14.7	15.9	53.7	14.3	30.0	10.2	63.8

注) 10の顧問のタイプ 複数選択

第VI章 教師たちの部活動観



1. 部活動に対する考え

サンプル構成

今まで、生徒たちの部活動観を在部生や退部生別に考察してきた。しかし、改めて触れるまでもなく、中学の部活動は教師の指導に支えられている部分が多い。そこで、生徒を対象とした調査とは別に、教師にも部活動についての調査用紙を配布することにした。

正直なところ、教師を対象にした調査はまとまった回収数を得るのに苦労することが多い。しかし、今回の調査に限っては、先生たちの反応が敏感で、あっという間に、3,000通近い回答が送られてきた。これは、回収率に

換算しても、30%にあたる。つまり、それだけ部活動のあり方に先生たちが強い関心を持っているためであろう。

なお、本調査に協力してくれた先生たちの構成は表17のとおりである。

教師たちの中で、部活動の指導を担当している者は78%と、ほぼ8割を占め、部活動を担当していない者は、22%にすぎない。

しかし、現在、部活動を担当していない教師のうち、81%は、かつて指導していたと答えているので、全体の中で換算し直すと

現在指導している	78%
----------	-----

今は指導していない { かつてはした 18%
 したことなし 4%
 となる。つまり、現在、部活動を指導してい

ないにせよ、かつての担当を含めると96%の
 教師がなんらかの形で部活動と関係を持って
 いたことになろう。

(表17) 教師のサンプル構成

(%)

性 別	男 性 79.4	女 性 20.6
年 齢	25歳以下 15.7	40~44歳 9.6
	26~29歳 18.3	45~49歳 9.5
	30~34歳 20.2	50~54歳 13.1
	35~39歳 9.2	55歳以上 4.4
結 婚	未 婚 30.0	既 婚 70.0
通 勤 時 間	1時間以内 86.2	
	1~1.5時間 10.7	
	1.5時間以上 3.1	

2. 部活動指導をしていない教師の意見

どうして指導をやめたのか

そこでまず、部活動の指導をしていない教師が、どんな気持ちで部活動をみつめているのかを紹介しておこう。現在、部活動を指導していない教師たちも、かつて部活動を指導していた時は、

とても熱心	24%	} 63%
わりと熱心	39%	
ふつうぐらい	31%	
やや熱心	5%	} 6%
とても不熱心	1%	

と答えている。少なくとも6割は、熱心に部活動を指導した経験がある。

それだけに、彼らがどうして指導をやめたかが気がかりになる。

技術的に力不足	34%
日常勤務がきつい	26%

体力の衰え	22%
教材研究などの時間不足	17%
私的な用事	17%
担当としての時間が不足	14%

が、上位6項目までの理由で、体力の衰えに、指導面での力不足、それに、勤務の忙しさなどが加わって部活動の指導が困難になったらしい。

したがって、どういう条件が満たされたら指導を再開するかについては、

部活動以外の勤務が楽になれば	35%
もう少し暇ができたなら	31%
生徒の意欲が増してきたら	23%
指導技術が向上したら	22%
体力が回復したら	20%

との答えが得られている。もう少し、時間の余裕が生まれ、それに、体力回復や指導技術の充実が加われば、部活動の指導にたずさわりたいというのであろう。

3. 部活動指導をしている教師の意見

部活動指導の現状

指導をやめている教師の中で、多忙を理由としている者が多いのは、前述のとおりだが、それでは、現在、指導している教師たちは、どの程度、部活動の指導に時間をさいているのだろうか。

土日、祭日を返上	45%
放課後も遅くまで	28%
土日を除きかなり	5%
ほどほどにしている	14%
たまに指導する程度	14%
名前だけの顧問	8%

が、その結果だが、休みなしで指導をしている教師がほぼ半数、そして、土日はともあれ、その他の日は夜遅くまでが28%となる。したがって、4分の3の教師が、部活動に打ち込んでいることになる。

なお、一日平均でも、

1時間未満	16%
2時間未満	40%
3時間未満	35%
4時間以上	9%

と、2時間以上が4割と、これは予想を上回る数値だった。

確かに、毎日2時間以上、そして土日を返上して部活動にタッチしていれば、私生活を圧迫することは避けられまい。

いつも	24%	} 48%
時々	24%	
多少は		25%
少しは	23%	} 27%
ぜんぜん	4%	

と教師たちの半数は、部活動指導が、私生活を圧迫していると答えている。しかし、幸いなことに、表18のとおり、6割の教師たちは、自分の家族とのトラブルもなく、部活動の指導にあたっており、中でも3割強は家族からの理解も得られているという。したがって、時には家族との多少の摩擦が生じるとしても、決定的な溝を作ることなく、部活動の指導にあたっているように思える。

部活動指導を行う理由を尋ねた項目では、

学校教育に不可欠な活動	42%
生徒の生き生きとした姿を見たい	32%
自分の趣味として	10%
仕方なしに	6%

のように部活動は、大事な教育活動だし、生徒の生き生きとした姿に接することができる

(表18) 部活動指導と私生活

(%)

家族とのトラブル	家族からの支持	割合
なし	あり	34.9
	なし	27.1
時々	あり	31.4
	なし	4.7
いつも	なし	1.9

が、8割近くに達した。

図43が示すとおり、部活動の指導をしていると、肉体的にも、精神的にも、負担がかかってくる。そして、時には、重荷を感じることもある。しかし、部活動は、

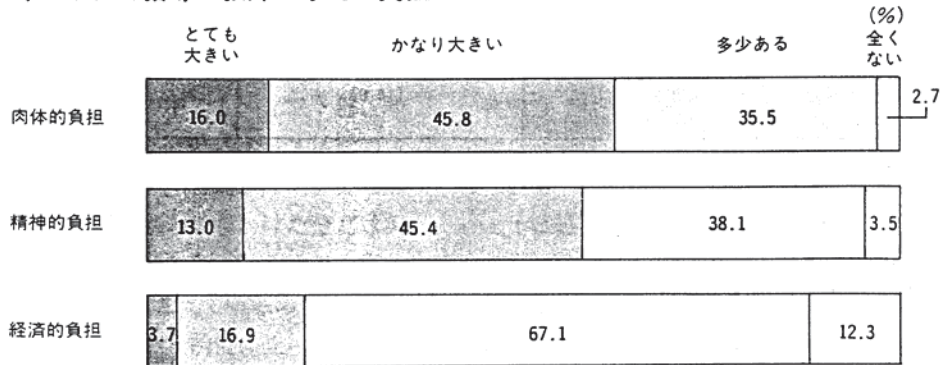
- 教師の強い意欲が大切 18%
- 教師と生徒両者の意欲が大切 77%
- 生徒の強い意欲が大切 5%

と、生徒の意欲もさることながら、教師の意欲があって始めて成り立つ部分が多いと考える。しかもそうした部活動をとおして非行を阻止する力もある(図44参照)。したがって、

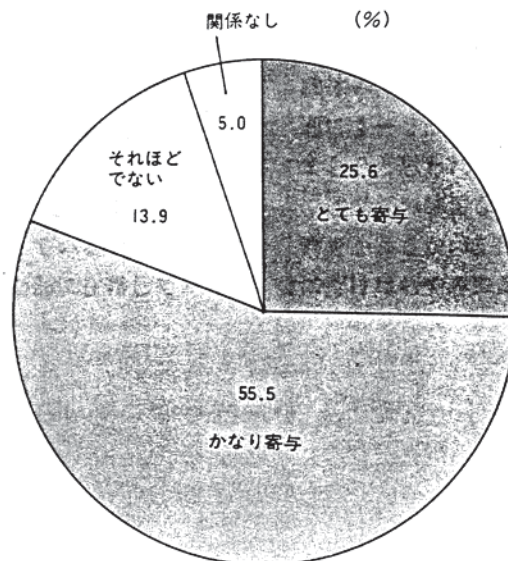
教師の使命として、多少苦しいことがあっても、部活動の指導にたずさわるべきだというのであろう。

なお、生徒たちの調査の中で部活動と勉強との両立が大きな問題として浮かんできた。しかし、教師たちは表19のとおり、両立可能と考える者が7割を超え、生徒たちの反応と、大きな開きを示した。部活動ぐらいで、勉強ができなくなるとは思えないというのである。生徒の方が勉強に神経質になりすぎているのかもしれないが、教師の側も生徒の心をつかみきれていない印象を受けた。

(図43) 部活動指導が教師に与える負担



(図44) 部活動で非行を防げるか



(表19) 教師からみた部活動と勉強の両立

(%)

尺 度	部	文 化 部	運 動 部
1. 必ず両立できる		32.3	26.4
2. 両立できる		53.7	45.7
(小 計)		(86.0)	(72.1)
3. 半分半分		13.3	22.0
4. 両立しにくい		0.6	5.2
5. 両立できない		0.1	0.7
(小 計)		(14.0)	(27.9)

まとめに代えて

調査データを読み終えて雲がすっかり晴れたような感じがして気持ちがすっきりする場合と、依然として実態はベールに包まれたままという感じのすることがある。後者は、調査仮説と実態との間にずれがあった時におきがちだが、正直なところ、今回の調査は、残念ながら後者に属すると言わざるをえない。

確かに、部活動と言っても学校差が大きい上に、ひとつの学校の中でも、ソフト部、陸上部、バレー部などと、部によって活動のスタイルがかなり異なる。したがって、部活動は、学校の数に部活動の数をかけた分だけ実態が存在するのかもしれない。そうした意味では、部活動は個別化されているのであって、平均的な姿はないという前提に立って、分析を進めるべきだったと思う。一つひとつの個別差が入りこんで、データの鮮明度を低下させたのであろう。

そうした反省はともあれ、今回の調査をとおして、明らかにされた結果も少なくない。特に、部活動と勉強との両立に悩む生徒の姿が印象的であった。

「部活動で疲れてしまい、勉強時間が不足している人が多い」という意見に、男子の48%、女子の56%が共感しているのがその一例であろう。確かに、運動部に在籍している

生徒たちの平均的（最頻値という意味で）な活動状況は、休みや日曜日を返上し、休日は3～4時間、そして平日は毎日2時間というものであった。そうだとすれば、部活動に疲れきり、予習や復習の時間がなくなるのが当然なのかもしれない。

しかし、部活動の満足度について「少し」の28%を含めて72%の生徒は満足している。疲労度についても「ぐったり」・「かなり」疲れるのは34%で、半数に近い45%は「少し疲れる」程度だという。

とは言え、休みや日曜日を返上してまでの毎日の活動は、学校教育としては行き過ぎの感を否定し難い。この問題は、部活動の目的に関連してくるが、生徒たちの答えているとおり、運動部にしたところで、体力を養い、技術や能力をみがくと同時に、友情を育てるのを目的としていよう。オリンピック候補選手を育成するのではない。そうだとすれば、時間を能率的に使い、週に3～4回、日曜日は休み、休み中も、大会などの前を除いては週に1～2回任意参加という程度の形態が望ましいと思われる。

運動部の練習などを見ていると、1年生は声をかけるか、球拾いのみで、礼儀や言葉遣いにだけはむやみに厳しいという姿によく接す

る。授業の中であれほど民主的を叫んでいる学校で、運動部となるとどうしてあれほど封建的な文化を許しているのか理解に苦しむ。幸い、今回の調査では、コーチから体罰を受けたことのない生徒が46%と半数に近かった。ほっとした反面、体罰を「よく」「時々」受けている生徒も33%と、3分の1を占める点に着意したいと思う。

少なくとも、学校教育で扱うスポーツは、楽しく伸び伸びと活動することをねらいとし、選手養成的なものは、生徒が任意に加入する地域での活動に移行するのが望ましいだろう。

部活動が思ったほど機能していない例証として第三章で触れた部活動をやめた生徒たちのデータが注目をひく。調査実施にあたって部活動をやめた生徒は、空しい生活を送っているものと予想していた。しかし、63%の生徒は、部活動をやめてよかったと言っているし、やめた後の学校生活は「変わらない」か「むしろ楽しくなった」が、82%を占める。そして、勉強の成績が上がった者は3割を超える。

そうは言うものの、やはり部活動のない生活に内面の淋しさはつきまとうらしく、すでに触れたとおり、もう一度中学生を送れたら

「部活動に入りたいと思う」が、かつて運動部にいた者の8割おり、また「部活動をしている仲間がうらやましいと思う」が56%に達している。

したがって、彼らの場合、彼らの心をつなぎとめる部活動がないことが退部という結果を招いたのであろう。そうした意味では、部に入ったことのない1割の存在も気がかりである。

中学生なら、どの生徒にも、なんらかの部活動を体験させたい。放課後何時間かを友だちとともに過ごす体験は、生徒たちにとって得るものが多いと思うからである。

部活動の時間や運営の仕方などを、もっと真剣に考えてもよいのではないか。しかし、そうした望みを述べるには、部活動が教師の私的な熱意に支えられている部分が非常に大きい点が問題となる。授業に加え、部活動の指導ともなれば、教師の労力負担は避けられまい。したがって、有給の指導員を保証する、地域のボランティアに指導を依頼するなど、指導のシステムを考えることが、部活動を充実させるための前提条件のように思えてくる。